

## 日本医学教育学会第33回大会：東海大学医学部（2001年）\*1

大塚 洋久\*2

第33回日本医学教育学会大会は、黒川清東海大学医学部長を大会長として2001年7月27日（金）、28日（土）の2日間、砂防会館別館・シェーンバッハ砂防（東京都千代田区）で開催された。大会参加総数は645名であった。特別講演Ⅰ・Ⅱ、シンポジウムⅠ（8題）・Ⅱ（8題）、ワークショップ、要望および一般演題125題について講演発表などがなされた。

基調テーマ「IT時代の医学教育」については時宜を得てはいたが、社会情勢の急激な変化に、当初の構想が十分に追いつけないところもあった。本学会最初の試みとしてインターネットで演題公募を行った。郵便利用の公募要領を先に提示したにもかかわらず、応募131題中100題までがインターネット応募であった。

特別講演ⅠはUCLAのLuAnn Wilkerson教授による「Faculty Development: Preparing for Change in Medical Education」、特別講演Ⅱは黒川清大会長による「医学教育のリフォーム—新世紀への挑戦」を行った。いずれも満員の盛況であり、立ち見された参加者に申し訳なく思いながらも、企画側としては喜ばしいことであった。

シンポジウムⅠはグローバリゼーションとITの時代を反映するものとして、シドニー・香港と会場を結ぶテレビ会議形式で行った。学会シンポジウムに新しい形式を提案するものであり、企画・運営に当られた櫻井恒太郎教授（北海道大学）、大櫛陽一教授（東海大学）ほかの各位に敬意を表したい。シンポジウムⅡはITと並んで現代の課題である倫理を取り上げた。坂上正道人間

総合科学大学学長の司会で、啓発的な討議が行われ、参加者に深い感銘を与えた。

ワークショップは能登洋氏（東京大学医学部糖尿病代謝内科）をコーディネータとして、参加型のEvidence-Based Medicine実践コースを行った。

要望演題・一般演題は125題と一昨年以前と比較して大きく増加し、内容も充実して活発な討議が行われた。学生による演題もシンポジウム1題を含め8題の発表があった。

学会前夜（26日木）には、R. M. Fincher教授による講演「Clinical Clerkshipをうまくやるには」を東海大学と卒前教育委員会が共催で、東海大学校友会館で開催し、100数十名の参加者があった。

日本医学教育学会総会において、西園昌久会員に名誉会員証が伝達され、細田瑛一会員に牛場賞、村上純子会員に懸田賞がそれぞれ贈呈された。運営委員制度から理事・評議員制度へ移行する会則変更が承認された。

学会アンケートについては、招待者を除く参加者621名に対する回収率は13.4%（83名）であった。基調テーマについて適切とする者43名で、ほぼ参加者の支持を得たものと思う。特別講演Ⅰ、Ⅱの評価点が高く、会場の雰囲気もそれをうかがわせるものであった。シンポジウムⅠ、Ⅱは高い評価点であったが、テーマに対する興味にばらつきがうかがわれた。ワークショップは実際に参加した者からの評価は高く、自由意見でも参加型セッションを望む意見があった。ポスター展示は今回行わなかったが、今後の導入については賛否半ばした。会場の環境、運営および展示についてはほぼ好評であった。例年の参加費7,000円を8,000円にしたが、著しい割高感はなかったようである。コンピュータプロジェクターによる発表を一般要望演題でも認めてほしいとの意見があり、今後は考慮されるべきと考えた。

\*1 The 33rd Congress of Japan Society for Medical Education (2001), Tokai University, Department of Medicine

キーワード：日本医学教育学会大会，第33回，2001年

\*2 Hirohisa OTSUKA 東海大学医学部